

## 「ホコリタケの教材性(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

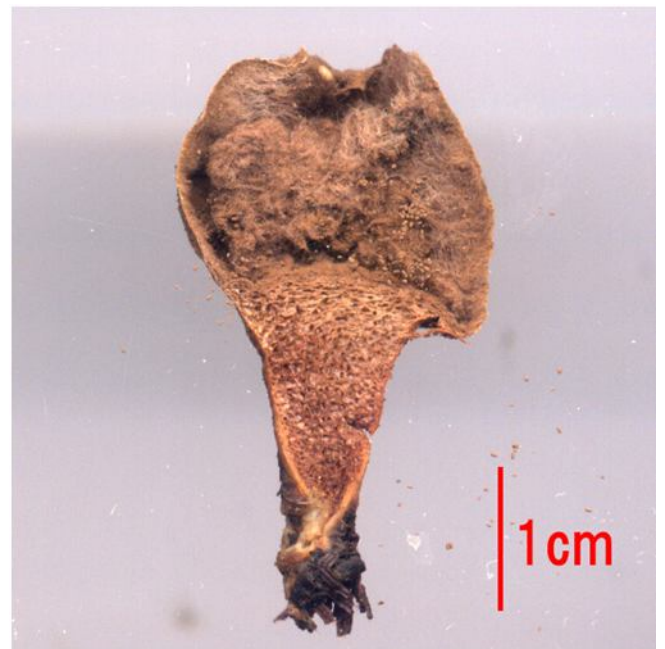
ホコリタケは、発生したばかりの若い子実体は、中身がハンペン状で、食用にもなる。しかし、シイタケのようなヒダを持たないこの菌は、体の内部に胞子を形成する。この形態から、かつては「腹菌類(綱)」に分類されていた。現在は、胞子のできかた(担子の形態)などから、ハラタケ綱に分類されている。

最初ハンペン状だった子実体内部は、成熟するにつれて水分が抜けて、粉(胞子)まみれの、茶色い脱脂綿のように変化する。こうした胞子のつくり方は、「ノウタケ」「ツチグリ」「エリマキツチガキ」などにも見られる。

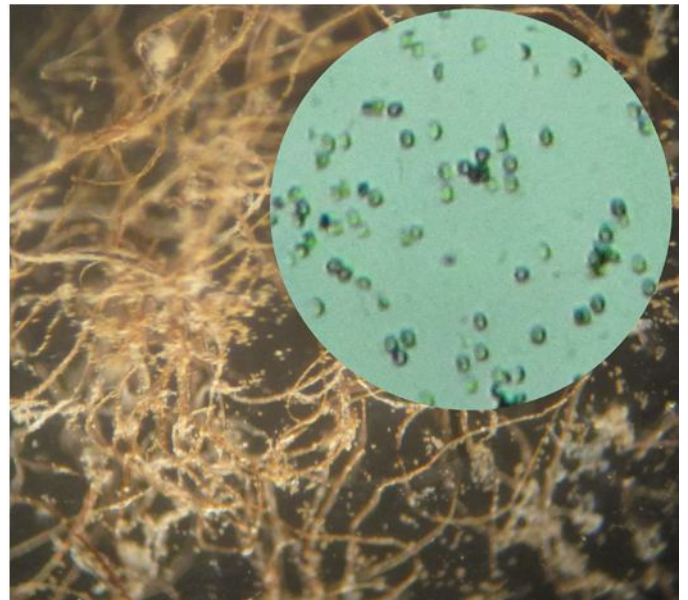


写真でもわかるように、成熟した子実体上部(写真では左側)に孔がある。この孔は、幼菌にはない。孔の奥には、古綿状の菌糸体と、そのすき間にぎっしり詰まった、茶色い胞子が見える。水分は完全に抜けていて、非常に軽い。風が吹いても胞子を飛ばすが、動物や人が触れた時も、この孔から勢いよく、煙のように胞子をばらまく。革質の外皮は、腐ることがないので、何か月もこのまま地面に残ることもある。

この形態から、「キツネノチャブクロ(狐の茶袋)」「ケムダマ(煙玉)」など、異名も多い。また、粉状の胞子は漢方や民間薬として、止血や咳止めなどに使われたという。(効能は定かでない。)



成熟した子実体を縦に切断すると、柄の部分には胞子はなく、頭部の古綿状のところに集中している。ハサミで簡単に切れるので、子どもでも容易に内部を観察できる。



これは子実体内部の菌糸(×100)と胞子(×400)である。菌糸が複雑にからみあっているすき間に、胞子がつまっていることがわかる。胞子の大きさは、 $1\sim\mu\text{m}$ ( $1/1000\text{mm}$ )程度しかなく、スギ花粉の $1/10$ 程度しかない。子どもが観察するのは、菌糸までだろう。しかし、観察から、教材性の高いキノコとわかった。